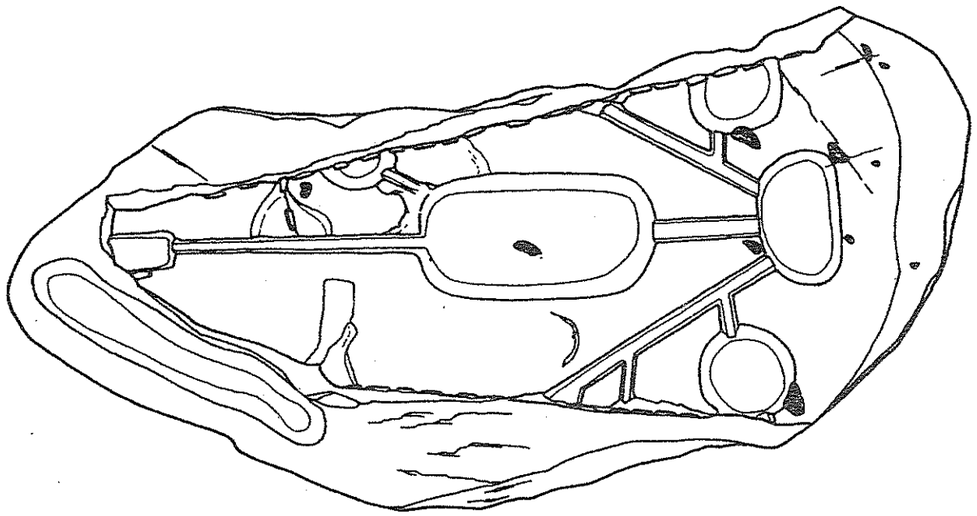
明日香村発掘調査報告会

平成９年度



明日香村教育委員会

平成１０年１１月８日

次　　第

・受　　付	１：００
・開　　会	１：３０
・開会あいさつ	１：３０
・調査報告	１：４０　～　３：１０
①カナヅカ古墳の調査	１：４０　～　２：１０
②酒船石遺跡の調査	２：１０　～　２：４０
③キトラ古墳の調査	２：４０　～　３：１０
・記念講演	３：２０　～　４：２０

演題『飛鳥京と酒船石をめぐる諸問題』

講師　関西大学名誉教授

明日香村文化財顧問　　網　干　善　教　氏

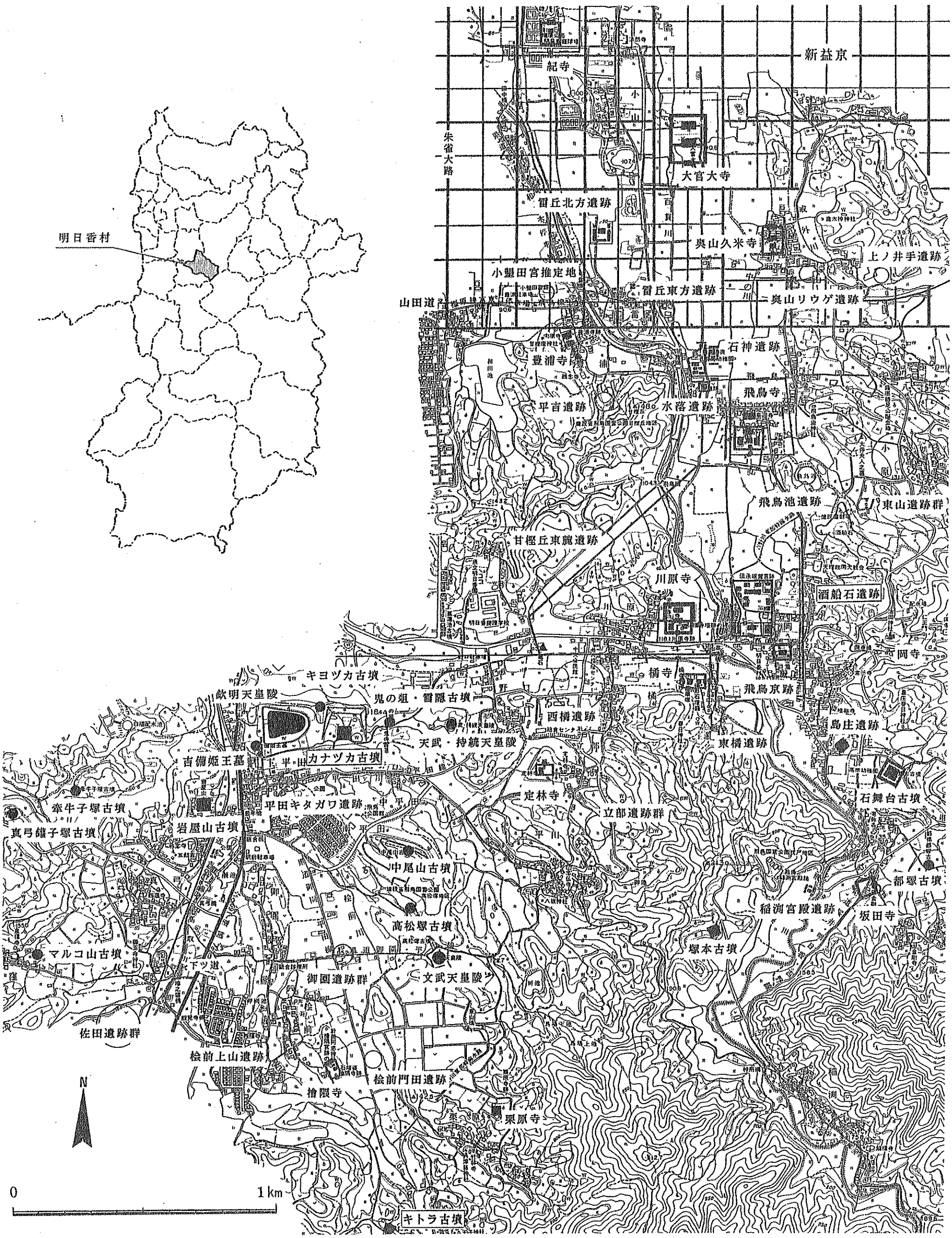
・閉会あいさつ	４：２０
・閉　　会	４：３０

調　査　報　告

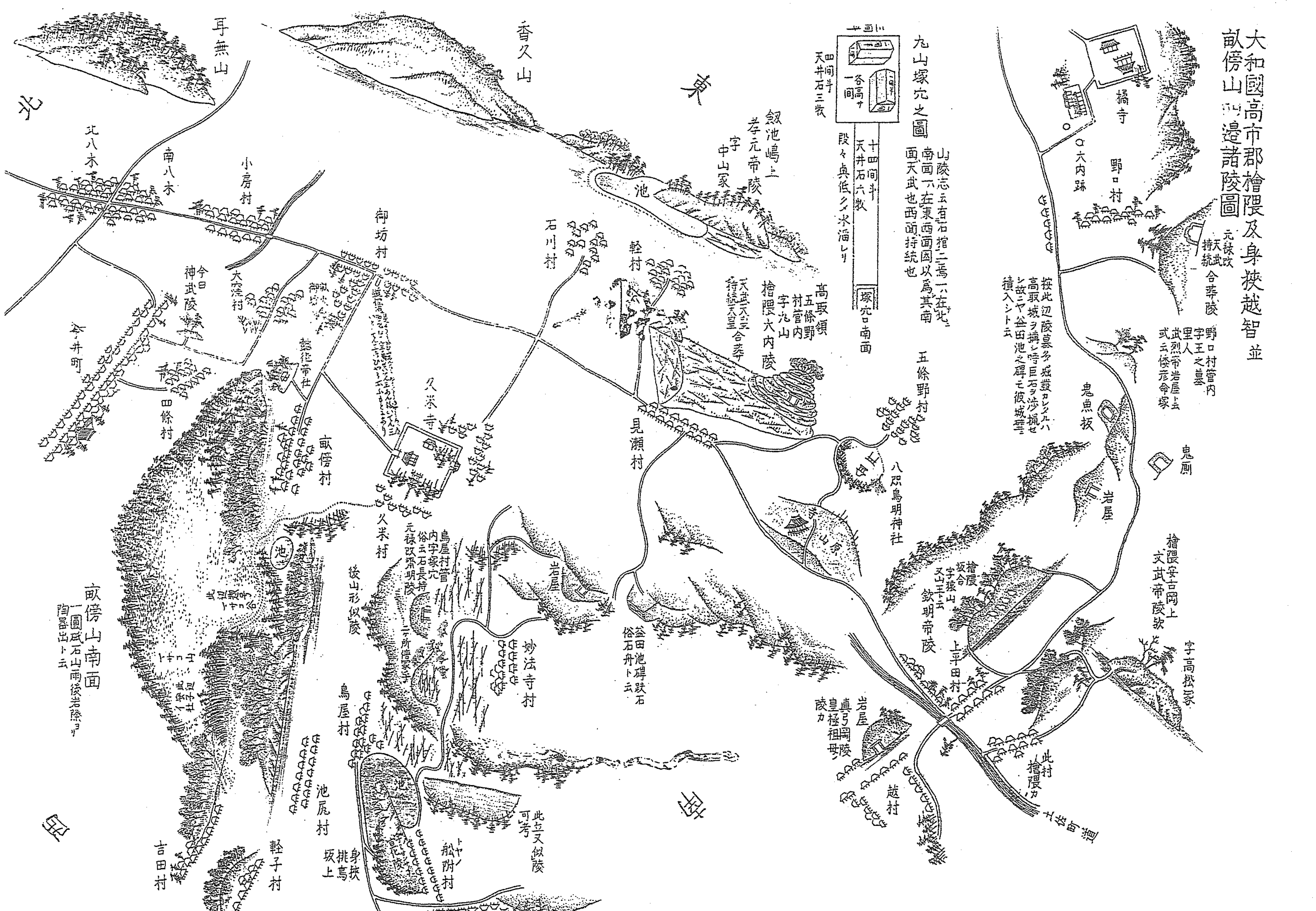
①カナヅカ古墳の調査　文化財課　相　原　嘉　之

②酒船石遺跡の調査　〃　清　岡　廣　子

③キトラ古墳の調査　〃　西　光　慎　治



明日香村内主要遺跡地図



大和國高市郡檜隈及身挾越智並畝傍山四邊諸陵圖
耳無山
香久山
北
東
西
北八木
南八木
小房村
御坊村
石川村
今井町
四條村
畝傍村
久米寺
久米村
今日神武陵
大窪村
綏靖帝社
見瀬村
軽村
池
叙池嶋上 孝元帝陵 字中山冢
高取領 五條野村管内 字丸山 檜隈大内陵 天武天皇持統天皇合葬
丸山塚穴之圖
山陵志云有石搉二焉一在北一在南面一在東西面因以為其南面天武也西面持統也
塚穴南面
十四間斗 天井石六枚
四間斗 天井石三枚
段々真低クノ水涵レリ
各高サ一間
五條野村
八咫烏明神社
橘寺
野口村
大内跡
元禄改 天武持統合葬陵
野口村管内 字王之墓 里人云 武烈帝岩屋也 或云倭彦命塚
按此辺陵墓多破毀カレタルハ高取城ヲ築シ時巨石ヲ渉損セシ故ニヤ益田池之碑モ彼城壁ニ積入シト云
鬼魚板
鬼廁
岩屋
檜隈安古岡上 文武帝陵歟
字高松冢
檜隈坂合陵 字猿山 又山王ト云 欽明帝陵
上平田村
此村檜隈ナリ
土佐町道
越村
岩屋 真弓岡陵 皇極祖母陵カ
益田池碑趺石 俗石舟ト云
妙法寺村
鳥屋村管内字塚穴 俗云石長持 元禄改宣化帝陵
後山形似陵
鳥屋村
池尻村
身挾桃花鳥坂上陵
船附村
此又似陵可考
軽子村
吉田村
畝傍山南面 一圖畝石山雨後岩際ヨリ陶器出ト云

第３次調査
第１次調査
第３次調査
第１次調査
第２次調査
第２次調査
鬼の雪隠
鬼の沮
高　市
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
114.0
114.8
113.4
111.4
105.1
112.5
111.5
103.1
107.5
99.1
100.5
94.4
96.5
93.4
92.5
91.6
95.8
94.8
89.8
88.9
87.3
87.6
87.0
89.1
89.5
101.4
113.2
117.3
101.9

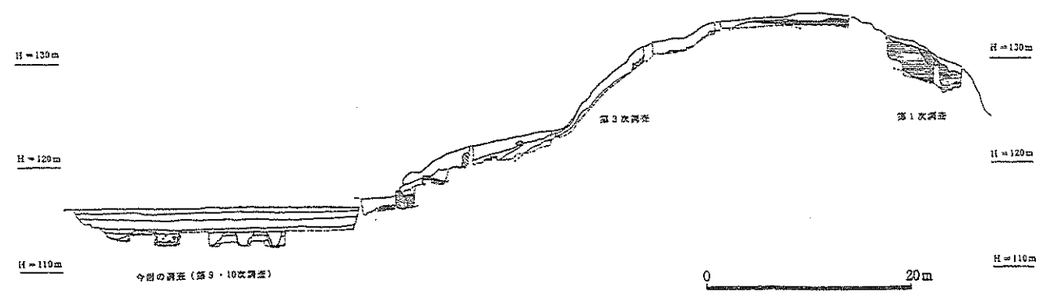
鬼の俎・雪隠古墳
天武・持統天皇陵
欽明天皇陵
カナヅカ古墳
高市郡
明日香村
高市郡
石舞台古墳（参考）
岩屋山古墳（参考）
鬼の俎・雪隠古墳
天武・持統天皇陵

飛鳥寺
飛鳥池遺跡
飛鳥寺南方遺跡
酒船石遺跡
今回の調査地
飛鳥京跡第６６次
飛鳥京跡第５１次
飛鳥京跡第１１９次
飛鳥京跡第９７次
飛鳥京跡
飛鳥京跡第４７次
川原寺
橘寺
0
200m

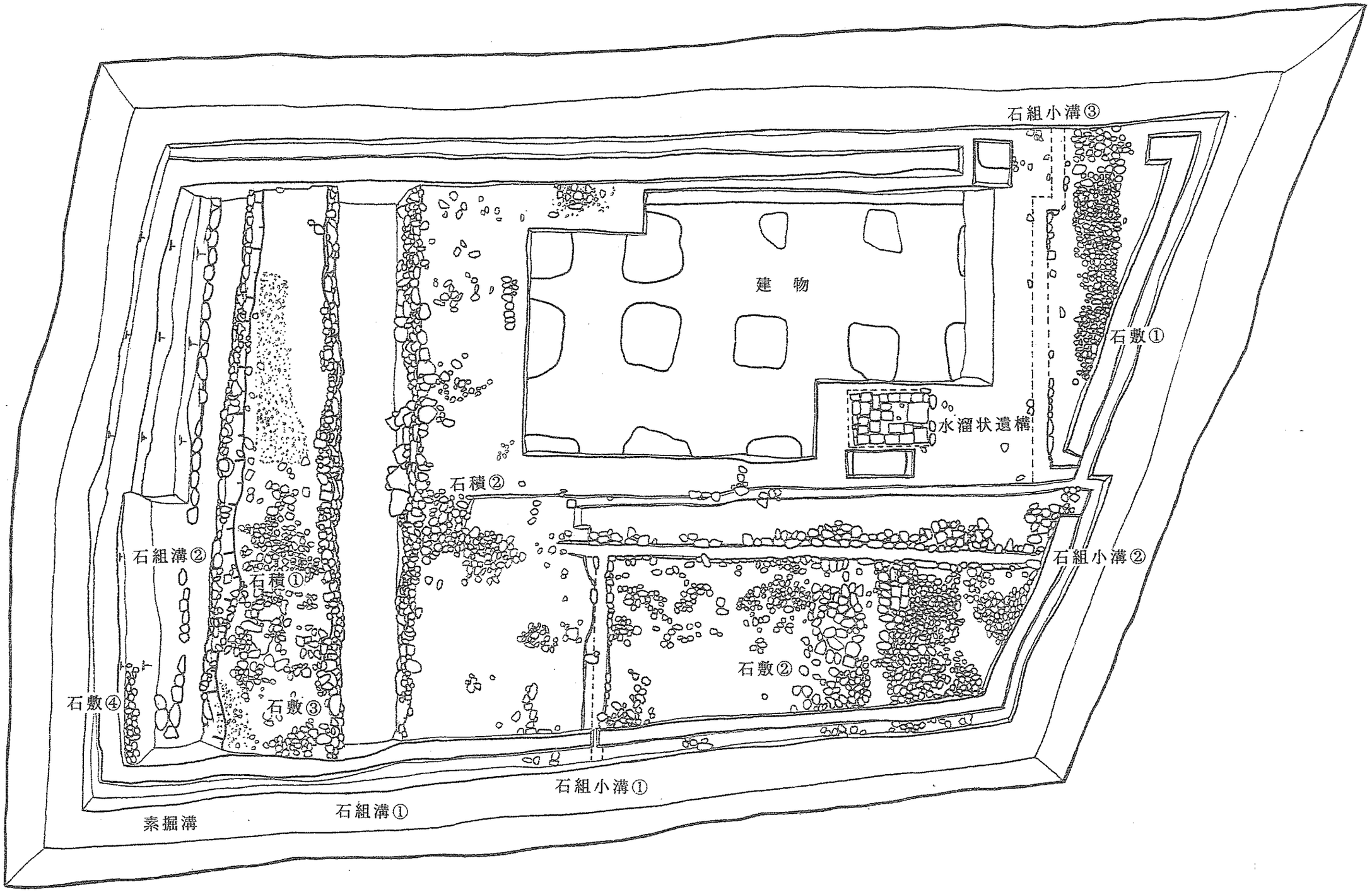
酒船石遺跡周辺図

明日香民俗資料館
明日香民俗資料の家
健民グラウンド
第６次調査
第２次調査
第１次調査
第３次調査
第７次調査
酒船石
第５次調査
第４次調査
第８次調査
今回の調査（第９・10次調査）
天理教岡大教会
第２次調査

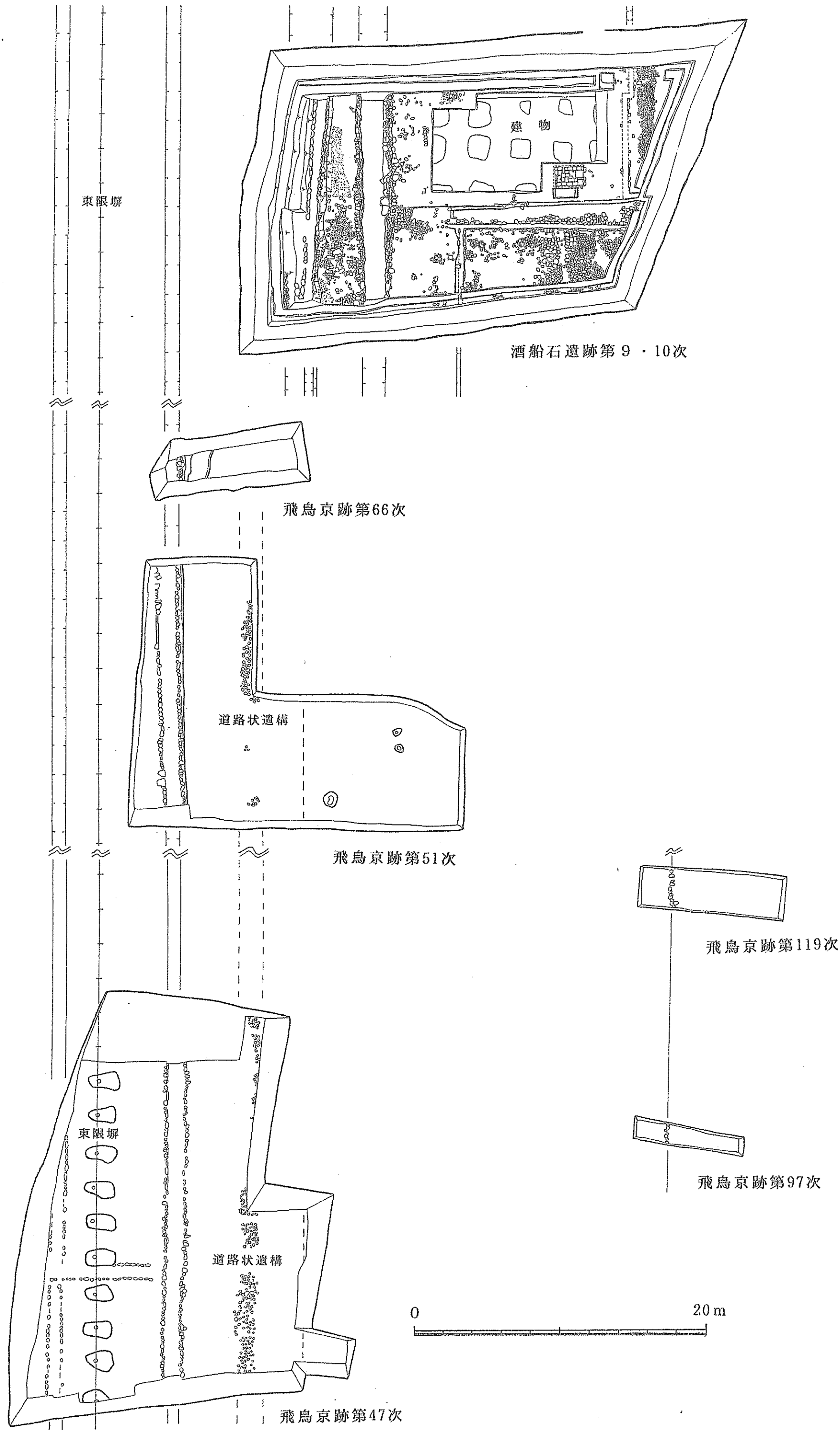
酒船石遺跡調査位置図（1:2500）



酒船石遺跡断面模式図（1:600）



酒船石遺跡（第９・10次）遺構図（1:100）



酒船石遺跡周辺遺構図（1:250）

記　念　講　演

『飛鳥京と酒船石をめぐる諸問題』

講　師：関西大学名誉教授
明日香村文化財顧問　　網干　善教　氏

あすか古京

第58号

「天皇」の木簡出土

網干善教

最近、明日香村で珍しい木簡が出土し、注目されている。奈良県は万葉の故地飛鳥に「万葉ミュジアム」を建設することになり、その予定地の旧飛鳥池で発掘調査が行われている。場所は飛鳥宮跡（伝承板蓋宮跡）と飛鳥寺のほぼ中間の東側で、酒船石のある丘陵（飛鳥民俗資料館と健民グランドのある東側）にあたる。平成十年三月三日付の新聞によると、この発掘調査ですでに三千点以上の木簡が出土しており、最終的には五千点ほどになることが予想されるという。そして出土した木簡の洗浄作業がすすめられいるなかで「天皇」と墨書したものが見つかったというのである。

木簡が出土したのは調査地の中央を南北に走る幅六～七・五㍍、深さ〇・五～一㍍の溝の中にあったといわれる。

残念ながら木簡は下端の方が折れているが、十二㌢ほど残っており、「天皇聚□弘□□……」（□は判読不能）とある。「聚」と「弘」の間文字は「露」と読めそうだが、それにしても意味は不明であるといわれている。しかし、飛鳥出土の木簡に「天皇」とあるのは重要だ。

ところで興味はそれだけでない。この木簡と同時に出土した他の木簡に、「丁丑年十二月」と書いたものがあると報道されている。この丁丑（テイチュウ＝ひのとのうし）の年というのは天武天皇六年（六七七）にあたるとみるのがよい。

天武六年といえば都は飛鳥浄御原宮。『日本書紀』によると十二月には「雪ふりて告朔せず」とあることから飛鳥に大雪が降ったようだ。また、前年の五月には「南渕山・細川山を禁めて、並に蒭薪ること莫れ」と勅されたりした。六年になると、二月に飛鳥寺の西の槻の下で多禰嶋人に饗えられたり、六月には大きな地震が起った。八月には飛鳥寺で設齋があり、一切経の転読が行われたり、十一月には大雨が降ったとも記録している。

「天皇」の木簡だけでなく、日本古代史上重要なことが書かれた木簡数点が出土しているという。

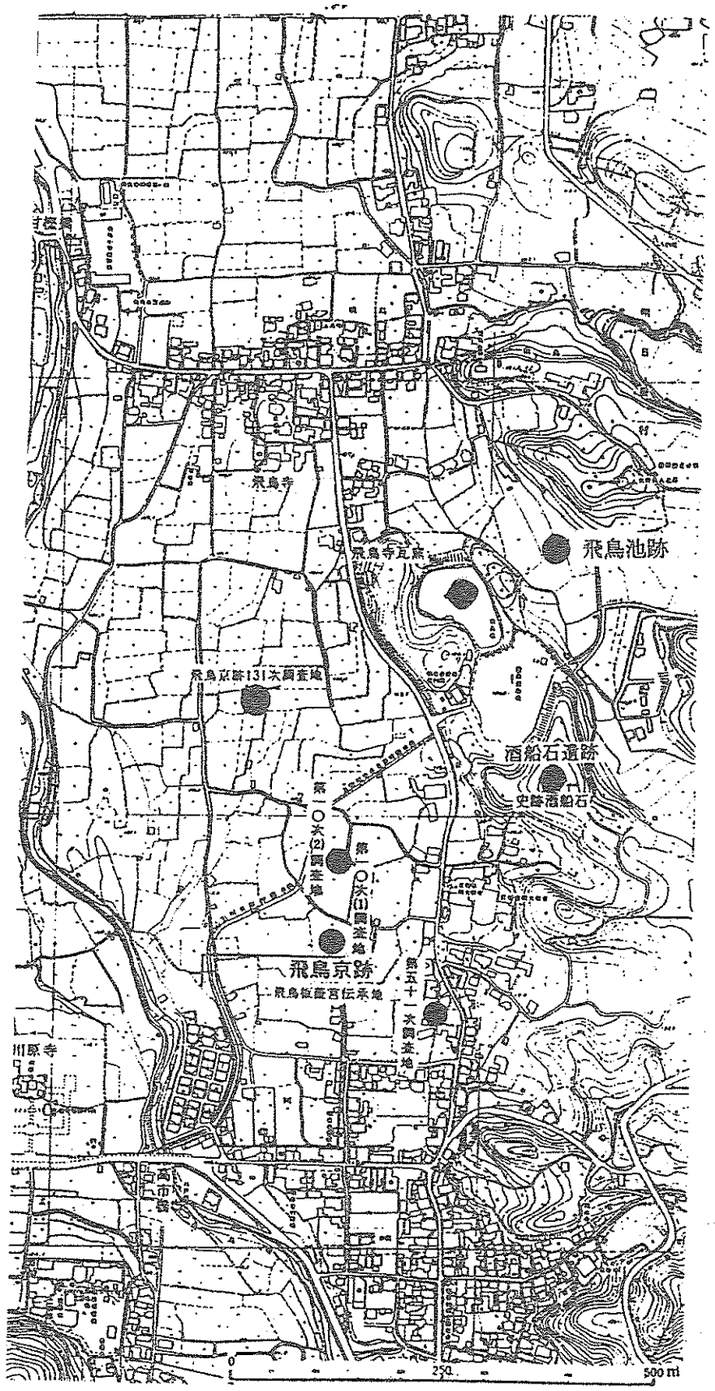
前述の木簡の表面に「丁丑年十二月三野国刀支評次米」、裏面に「恵奈五十戸造」とある。表面の「三野国」は「美濃国」、今の岐阜県、裏面の「恵奈」は現在の岐阜県恵那市であることは間違いない。

さすれば、この木簡は岐阜県からなぜ都のある飛鳥に送られてきた荷物に付けられていたのだろうか。調査者は表面の「次米」を重視している。「米」は米であるが、「次」という文字を「すき」と読んでいる。天皇が即位の時に行なう「大嘗祭」に使う米を「主基（すき）」と「悠紀（ゆき）」の二国で生産することになっている。そうしたことから「次米（すきまい）」を「主基（すき）米」と考えられた。

ちなみに天武六年十一月の『日本書紀』の記事に「己卯（つちのとう）（二十一日）に、新嘗す。辛巳（かのとみ）（二十三日）に、百寮の諸の位有る人等に食賜ふ。乙酉（きのとり）（二十七日）に、新嘗に侍へ奉りし神官及び国司寺に禄賜ふ」とあって、「新嘗」の行事が行われたことが知られる。三野国恵奈から献上された品物はこの時の「次米」（主基国の米）であろうかと推定している。

「五十戸造」も重要である。「五十戸」というのは、大化二年（六四六）正月の大化改新の詔のなかに「凡て五十戸を里とす。里毎に長一人を置く」と定められた。「戸造（さとのみやつこ）」というのは「戸（里）」の役職と考えられる。これも古代の行政のしくみを知る上で重要なものといえる。

人物では「観勒（かんろく）」という名前があるといわれる。観勒という人名は『推古紀』十年（六〇二）に「百済僧観勒来けり。仍りて暦の本及び天文地理の書、并て遁甲方術の書を貢る。是の時に、書生三四人を選びて、観勒に学び習はしむ」とある。また、観勒のことは推古三十二年四月の条にもみえる。『三国佛法傳通縁起』によると観勒は飛鳥寺に住していたという。年令が問題だ。



飛鳥京跡位置図

紀年

「丁丑年四月生六日……□等」　天武六年（六七七）

「癸巳年□」　持統七年（六九三）

評

「无邪志(16)国仲評中里布奈大贄一斗五升」

「確日評□大□小丁」

「佐為評」

「奈須評」

「三形評」（以下略）」

五十戸

「川奈五□戸煮一篭十八列」

「野五十戸（以下略）」

「（略）三形五十戸生マ乎知」

「□（多力）真方五十戸」

〈飛鳥池〉

「天皇□聚□弘□□……」

「丁丑年十二月三野国刀支評次米」

「恵奈五十戸造」

是歳、飛鳥の岡本に、更に宮地を定む。時に、高麗・百濟・新羅、並に使を遣して調進る。為に紺の幕を此の宮地に張りて、饗たまふ。遂に宮室を起つ。天皇、乃ち遷りたまふ。號けて後飛鳥岡本宮と曰ふ。田身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以てす。田身は山の名なり。此をば大務と云ふ。復、嶺の上の兩つの槻の樹の邊に、觀を起つ。號けて兩槻宮とす。亦は天宮と曰ふ。時に興事を好む。廼ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の謗りて曰はく、「狂心の渠。功夫を損し費すこと。三萬餘。垣造る功夫を費し損すこと、七萬餘。宮材爛れ、山椒埋れたり」といふ。又、謗りて曰はく。「石の山丘を作る。作る隨に自づからに破れなむ」といふ。若しは未だ成らざる時に據りて、此の謗を作せるか。（斉明紀）

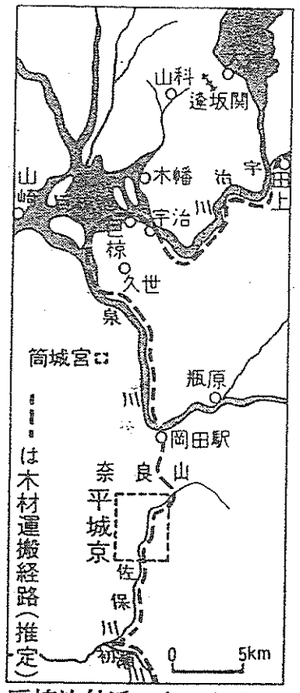
九月の己丑の朔丙申（八日）に、車駕還りて伊勢の桑名に宿りたまふ。丁酉（九日）に、鈴鹿に宿りたまふ。戊戌（十日）に、阿閉に宿りたまふ。己亥（十一日）に、名張に宿りたまふ。庚子（十二日）に、倭京に詣りて、嶋宮に御す。癸卯（十五日）に、嶋宮より岡本宮に移りたまふ。

是歳、宮室を岡本宮の南に營る。即冬に、遷りて居します。是を飛鳥淨御原宮と謂ふ。（天武即位前紀）

藤原宮の役民の作る歌

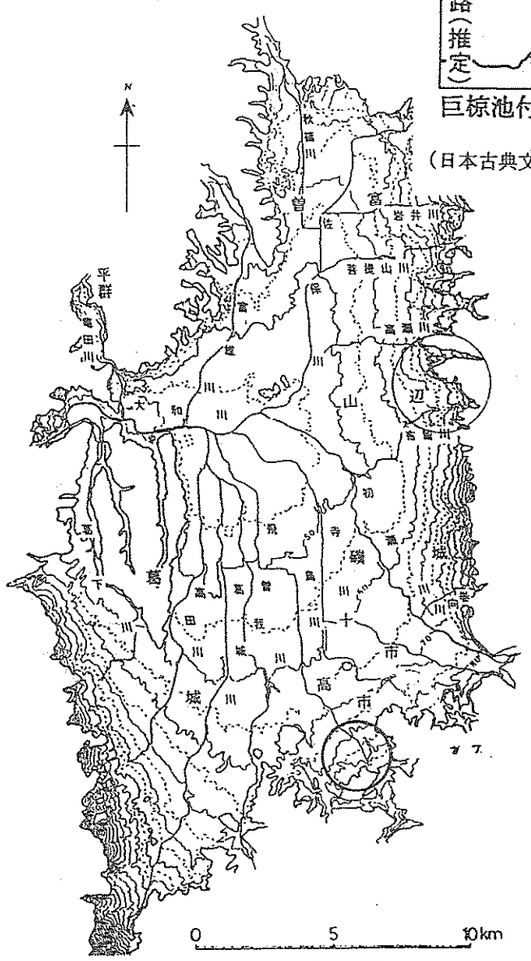
やすみしし　わご大王　高照らす　日の皇子　荒栲の　藤原がうへに　食す国を　見し給はむと
都宮は　高知らさむと　神ながら　思ほすなべに　天地も　寄りてあれこそ　石走る　淡海の
国の　衣手の　田上山の　真木さく　桧の嬬手を　もののふの　八十氏河に　玉藻なす　浮かべ
流せれ　其を取ると　さわく御民も　家忘れ　身もたな知らず　鴨じもの　水に浮きゐて　わが
作る　日の御門に　知らぬ国　寄し巨勢道より　わが国は　常世にならむ　図負へる　神しき亀
も　新代と　泉の河に　持ち越せる　真木の嬬手を　百足らず　筏に作り　泝すらむ　勤はく見
れば　神ながらならし

右、日本紀に曰はく、朱鳥七年癸巳の秋八月、藤原宮地に幸す。八年甲午の春正月、藤原宮に幸す。冬十二月庚戌の朔の乙卯、藤原宮に遷居るといへり。



巨椋池付近の水上交通図

（日本古典文学全集『萬葉集(1)』）



奈良盆地の水系と等高線図